

拾ったのが 本当に猫かは疑わしい4

ねこ沢ふたよ Nekosawa Hutayo



アルファポリス文庫

目次

第一章	拾ったのはせわしない日々かもしれない
第二章	拾ったのは頼れる隠密かもしれない
第三章	拾ったのは不思議な出来事かもしれない
第四章	拾ったのは信じたい家族かもしれない
第五章	拾ったのは当たり前の日々かもしれない

第一章 拾ったのはせわしない日々かもしれない

私、ほんたになる本田薫は、ある寒い雨の日に、とんでもないものを拾った。すがたなたち姿形は猫だけど、人間や様々な動物の言葉を理解して、じだいげき時代劇とビールを愛する不思議な猫モドキのモドキ。

モフモフで長毛種ちやうもうしゆの猫のように可愛いものの、中身は全然可愛くない。

けれども、とても頼りになる。

夫で獣医師じゅういしの優一ゆういちさんと、もうすぐ二歳になる娘の理歩りほと、トイプードルのマロンと私、そして猫モドキ。

生意気だけれども頼りになる猫モドキに見守られて、私たち家族は、とても幸せに暮らしているのだ。

まあ、モドキが本当に猫かどうかは疑わしいのだが……



玄関を出るのがこんなに難しいとは。

すすくと成長してくれている娘、理歩。しかし、十二月の朝に、母である私、本田薫はとても困っている。

十二月。これは、誰がなんと言おうが、日本では『冬』なのだ。

寒くてみんなコートを着て肩をすくめて歩いている。

なのに理歩は、本日の保育園へ行くコーデに、サンダルを選びたいと言つて聞かないのだ。

「理歩、ねえ。サンダルは……ね？ 寒いから。ほら、この猫さんの付いたピンクの靴にしようか？」

私は、この理不尽の塊（かたまり）娘）を、説得しようと試みる。

「いやー」

ブンブンと理歩は首を横に振つて、私の要求を受け入れてはくれない。

『魔の二歳児』

世間では、言語を理解できるようになり、自我が芽生え始めたこの時期の子をそう呼ぶらしい。言葉を理解すれば、使つてみたくなるもの。自我が芽生えれば、意見も言つてみたくなるもの。結果として、このように、「いや」「だめ」「ない」の嵐となるのだ。

もし、私が大富豪で外に働きに行かなくてよくて、子どもを保育園に通わせる必要もない身分だったとしたら、この幼子特有の我儘も、「お可愛らしいこと……よくつてよ、本日は、玄関で過ごしましゅうかしら。ほほほ」と笑つてみせるのだが、貧しき平民の私はそんなわけにはいかない。

私は働かなきゃいけないし、そのためには、せひとも理歩には保育園で過ごしていただきたい。

「ほら、こつちのお靴を……ね？」

私は、理歩の足を強引に靴にはめ込もうとする。

履きさえすれば、きつと諦めると思った。

だが、私の考えは甘かった。

「だめー!」

理歩は、靴を小さな手ではたき落とす。

うう……つらい。もう遅刻寸前なんだけれども、どうしよう……
いっそ担いで保育園まで無理矢理連れていこうか。

……でもなあ。

大きくなってきた理歩がいよいよしているときに抱っこしたら、落としそうになる。
たとえて言うならば、獲れたてピピチのマグロ。

全力で暴れるマグロは、ベビーカーに乗せられないし抱っこも難しい。
凄腕漁師ではないただのアラサーOLの私には、無理なのだ。

「ふむ、その者、困っておるようじゃの」

そこに颯爽と愛馬（自動掃除機）に乗って現れたのは、モドキだった。
この猫モドキめ。

困っていると分かっているのなら、早く助けてくれたらいいのに。

「見ていたんなら、助けてよ」

「何を勘違いしておる。儂が助けるのは、薰ではない。理歩じゃ!」

「え?」

なんだと? 援軍が来たと思ったら、敵だったか!

これ以上話をややこしくされると、本当に今日は、仕事に行けなくなるのだけ
れど?

貴重な有休は、家族の誰かが病気になったときとか、理歩の保育園の行事に使用
したい。

「モド!」

援軍である愛しのモドキが来て、理歩が満面に笑みを浮かべる。

「ふむ。理歩は、本日はこの履物を履きたいのじゃな!」

「あい!」

意志の通じ合う理歩とモドキ。

「ふむ……」

モドキが、モフモフの尻尾を揺らしながら少し考える。
どうするんだろう……

「理歩よ。よき履物じゃ」

「あい！」

自分のサンダルを褒めてもらって、理歩は嬉しそうだ。

いや、でもさ、困るのよ。

冬よ？ サンダルで行ったら、風邪引かない？

「では、サンダルを履きつつ、温かくする方法を考えねばの。寒いのは、理歩も嫌じゃろう？」

「あい！」

え、そっちななの？

いや……そうなの？

「でもさ、モドキ……サンダルじゃ、保育園では困るのよ」

「分かっておる。外遊びにサンダルは不向きじゃ。だから、普段の靴は、薫が持つていくのじゃ」

園に着いたらコッソリすり替えるか、先生にお渡しすればいいってことか……

確かにそれならば、なんとかなるかもしれない。

「そうと決まれば、マロン！」

「ワン！」

モドキに言われてマロンが持ってきたのは、私の靴下だった。

え、まさか……

現在の理歩の足元コードをお伝えしよう。

白い靴下を履いてからのピンクのサンダル。その上に、私の室内履き用の毛糸の靴下……

いや、理歩の足はまだまだ小さいからさ、靴履いたままでも、靴下を余裕で履けるけれどもさ。

「何、理歩が風邪を引かないのであれば、薫の靴下くらい安いものであろう？ 実際、安物だろうし。しかも、これで出立でき、遅刻せずに済むのじゃ」

「そうだけれども……」

うう……私の靴下。

「ベビーカーに乗せていくのであるから、それで歩き回るわけでもなからう？」

「そうだけれども……さ……」

「おかあちゃん！ 行こー！」

そんな満面の笑みで言われたら、どうしようもないじゃない？

「ワン！」

マロンさん、さっさと行きなさいと仰いましたね。

仕方ない。うん。

靴下の尊い犠牲によって、我が家の平和は保たれたのだ。

◇ ◇ ◇

無事出社できた私は、ギリギリ遅刻を免れた。

会社の自分のデスクでパソコンを起動する間に、スマホのメールを確認する。

夫である優一さんからメールが来ている。

『大変だったようですね。モドキちゃんに聞きました』

猫モドキは、先に家を出ていた優一さんに、本日の玄関での顛末を報告したようだ。

『大変だったのよ！ 二歳児恐るべし』と、私は、返信する。

互いに仕事で忙しい私たち夫婦は、メールでの会話が多い。メールがない時代だっ

たら、ずいぶんと寂しい想いをしていたことだろう。

文明の利器よ、ありがとう。

「たるんでいますよ！ 薫さんがサボると、こっちにしわ寄せが来るんですからね！」

おう、言うてくれるやないか！ と、言いたくなるセリフを浴びてきたのは、後

輩の幸恵だ。

何を言うか。散々今まで仕事をサボって尻拭いをさせてきたのは、どう考えても幸恵のほうだ。

配偶者であるダーリンをこよなく愛し、仕事にまいちやる気を見せない幸恵は、度々突発的な有休を使って、共に業務を遂行する我々同僚を翻弄してきた。

幸恵が繁忙期に突然温泉旅行のための有休取ったの、忘れてないからな！ あのとき、地獄だったんだから！ 口には出さないけれど。

でも、今、ここで幸恵と争っている時間はないのだ。

仕事をして、さっさと帰りたい。

理歩の保育園のお迎えは、優一さんが行ってくれるから早退はしなくてもいいけれど、それでも愛する家族のもとに、私は一刻も早く帰りたいのだ。

いやいや期真つ盛りの理歩の相手をするのは、大変だ。
優一人に頼りっぱなしの状況にはしたくない。

「ねえ、知っています？ 薫さん」

だからさ……私は一刻も早く帰りたいのに、なぜ話しかけてくるのだ、幸恵よ。
今しがた、たるんでいると私を非難したのは、幸恵ではないか。

「何、またイケメンでも見つけたの？」

「違います。イケメンなんて、その辺に落ちていません」

我が社一のイケメン・ソムリエである幸恵のイケメンリーダーは完璧で、イケメン
を見つける度に私に報告に来るのだが、今回は違うようだ。

じゃあ、なんだろう。

趣味も性格も合わない幸恵が、私に話したいことなんて、他にあるのだろうか。

「実は……柿崎係長に、彼氏ができたみたいなんです」

「はあ？ 柿崎に彼氏？」

いかん。あまりに予想外の内容すぎて、声が裏返った。

私の友人でもある係長の柿崎は、仕事を大切にして、恋愛にはあまり興味ないタイ

プだ。

もちろん魅力的な人間だから、恋人ができたとして不思議はないのだけれども、友人
である私が知らないのに、それほど仲がいいわけでない幸恵がなぜ柿崎に恋人ができ
たと知っているのか、さっぱり分からない。

「薫さん、柿崎さんと仲がいいのに、知らないんですか？」

「いや、知らん。知らんよ、そんなこと。てか、どうしてそれを幸恵が知っている
の？」

今まで、柿崎と幸恵が仲が良かったことがあっただろうか、いや、ない。

柿崎が、彼氏ができたと幸恵に報告している場面がまるつきり思い浮かばない。

「そんなの、見ていたら分かりますよ」

「見ていたら……？」

見ていて、彼氏がいるかどうか分かるものなのだろうか？

普通分らないだろう？ だって、もし、恋人がいるかどうかが外見で判断できる
ならば、結婚詐欺なんてできないはずだ。

「そんなの、幸恵の勝手な決めつけでしょ？ 見て分からないじゃない」

「分かりますよ。だつてほら！」

幸恵が指さす方向にいるのは、当然、柿崎。

機嫌がいいみたいで、明らかにウキウキして、ニコニコの笑顔で仕事をこなしている。

「ほら、幸せオーラがはみ出ていますし」

「確かに、幸せそうだけれども……」

占い師でもない私は、柿崎がご機嫌な理由が、恋人ができたからだとは判断できない。

ほら、卵を割ったら黄身が二つ入っていたとか、近所のお散歩ワンコが可愛かったとか、そんな理由でも、人って案外幸せになれるじゃないか。そういうのかもしれないし。

「あれは、絶対に恋人ですね。あ、ほら、あの指輪！ ちょっと、デザインはダサめですが、あれを見て恍惚こうこうとしていますし」

なるほど……本当だ。

アクセサリーはあまり付けない柿崎が、左手薬指に指輪をしている。

ダサいかどうかは分からないが、柿崎が二匹の蛇が象かたどられた指輪をチラチラ見ては嬉しそうなのは、確かにそうだ。

え、つまりそういうこと？ でも柿崎に恋人はいなかったはず。

とりあえず、一旦落ち着け私。見間違いの可能性だつて……

うん、やっぱり左手薬指。

それは、古より心臓に一番近い指とされ、婚約指輪や結婚指輪を嵌める指なのだ。

……ならば、やっぱり、幸恵が言う通り、婚約、もしくは結婚したということなのだろうか。別に言う義務なんてないけれど、私は恋人ができたことすら聞かされてないぞ。

「年下バンドマンですね。あの指輪のデザインからして！」

混乱する私をよそに、幸恵が興奮しながら断言した。



薫さん、すごく苦労したみたいだな。

僕、優一は、大学の研究室でスマホを確認して、朝の玄関で起きた事件を知る。

僕は、祖母が院長を務める動物病院で働きながら、大学院での研究も続けている。これも愛する妻である薫さんが広い心で許してくれているからだと思えば、嬉しくて口元が緩む。

『僕の活躍により、見事に解決したのじゃ!』

モドキちゃんの自信満々なメールが、なんだか可愛い。

研究室は、今、トラブルの真つただ中だ。

モドキちゃんに頼んだら……助けてくれるのかな……

僕は、頭を抱える。

「チクショー!」

ゼミで飼っているオウムの小梅が絶叫する。

「だーからー!」ここは、絶対に、この結論で正しいんだってば! 症例もそう言っているでしょ?」

研究チームのリーダーである西島が戦っているのは、我がゼミに春から仲間入りした東山だ。

「あら、まだ分からないのかしら? それじゃあまだ、根拠が曖昧でしょ? 確か、同じ

ような研究をしたアメリカの論文では、この倍は症例を挙げておりますわ」

東山が、真つ向から西島の意見に反対する。

もう、春からずっとこんな感じで、全然研究が進まない。

今から倍の症例? そんなの無理すぎる。

東山の言うことは、間違っているわけではない。

確かにそれが理想というものだ。だが、それを実践するために必要な費用も時間も人員も僕たちにはない。

「ラクシュ……どうしたらいい?」

春に亡くなった実家の猫、ラクシュの写真に向かって、僕はつぶやく。

僕の机の上には、薫さんと理歩、モドキちゃんとマロンの写真と一緒に、ラクシュの写真も飾っている。

ずっと僕の相棒だった大切なラクシュ。青く澄んだ瞳で真つ白な毛並みのラクシュの写真を見つめれば、悲しさと一緒に、じんわりと温かい想いも蘇ってくる。

ラクシュ……

「そこ！ ペットロス・ド・オトウサン！ 泣かない！ 気持ちは分かるけれどもさー！
「え？」

いかん。大粒の涙が止まらなくなっていたら、西島に見つかってしまった。

つい、ラクシュとの日々を思い出して、涙が落ちてしまった。

「ともかく！ 我々獣医学生は、泣かないの！」

「うっ……ごめんなさー……」

日々動物の命と向き合うのが獣医師の仕事だから、愛猫あいねこの死をいつまでも泣いていては始まらない。

理屈では分かっているけど、涙が出る。

いつまで経っても慣れないし、なんなら自分が携たずわった患者かんちくの死に直面したときにも、僕は泣いてしまう。

「ともかく、このペスカトールを止めてよ！」

ペスカトール……とは？

あ……東山のことか？

どうも西島は、帰国子女の東山を横文字で呼びたがる。

だが、あまりに言葉のチョイスがいい加減すぎる気がする。

ベーコンエビとかペスカトールとか……ビーフストロガノフなんてのもあったな。

えつと……お腹が減っているのか？ 西島。

「そうは言いますが、無理ですよ。東山の言うことは、正論ではありませんし……」

「あら、本田はよく分かっているじゃないですの！ やはり、研究には、精度が大切ですよ」

異世界から転生してきた、悪役令嬢のような縦巻きロールの髪型が特徴の東山が、ホホホと、愛扇あいせんをはためかせながら優雅に笑う。

「でも、西島の言うことだって、分かります。だって、僕らには、予算も時間も人手もありません」

東山にはそうは言ったものの、もちろん西島の意見も何も間違っていない。そういう意味も含めて、西島の肩を持つ意見もしっかりと伝えておく。

「でしょ？ 不可能ならば、可能な範囲で頑張るしかないのよ。無理をすれば、どこかにしわ寄せがいくし。下手したら、研究自体がダメになる」

西島が、「チクショ」と鳴き翼をバサバサとはためかせる愛鳥の小梅を肩に乗せて、

ウンウンと頷く。

「小松はどう思う？」

研究室の壁になったかのように、気配を消していた小松に、僕は話を振ってみる。

「お前……裏切ったな！」

「だって、小松だけズルいです」

四人でやっている研究だ。この先の見えない争いから小松だけ逃げるなんて、できないはずだ。

というか、お願いだから協力して。僕だけでこの二人を説得するのは無理だ。

「小松の意見は？」

「そうよ。速やかに答えて！」

東山と西島に詰め寄られて、小松が青さめる。

「いや……その……本田と一緒に……その……ちょっと、二人で考えさせて」

「わ、小松？」

「死なば諸共だ」

小松……いや、最後に話を振った僕も悪かったけれども。まさか、こんな形で戻ってく

るとは。

「じゃあ、明日までに結論ね！」

「そうですわ！ 二人とも、ハッキリなさって！」

「チクショー！」

僕たちは、西島と東山と小梅の言葉に「はい」と答えるしかなかった。



育児というものは、仕事が終わって帰ったところからまた戦いが始まる。

柿崎に恋人ができたかもしれない疑惑のあった日の夜、私は、会社での出来事をモドキに相談した。

「ふむ。いろいろとあったようじゃの」

モドキは、ささみステイックを齧りながら、私の話を聞いてくれている。

猫に話したところで解決なんてしないだろうが、こういう小さなモヤモヤを聞いてくれるだけでもありがたい。

今は、手元に理歩の着替えを用意して、優一さんがお風呂から合図してくれるのを待っている状態だ。

風呂からは、理歩の機嫌がよさそうな声が聞こえてくる。

優一さんが、「いちご、にゃんこ、さんま、しろねこ、いつでもニコニコ五つ……」なんて、創作数え歌を歌って理歩と遊んでいる。

いや、理歩の好きなものを並べて歌っているのだろうか、多いな……ネコ。十まで数え終わるまでに、何度猫が登場するのだろうか。

「はちわれ猫さん、クッキー食べて、モドキとマロン……ワンコもくるりん、はい、おしまい！」

良かった。最後は、ワンコも登場するんだ。

いや、そこを良かったと捉えるかどうかはとても微妙だけれども。

これ……数は数えられているのだろうか？

元々、数え歌って変なものが多いし、かなり独特だ。

まあ、理歩も優一さんも楽しそうだから、いいけれど。

「薰さん！ 理歩、お風呂から出ましたよ！」

優一さんの声がして、理歩がとこゝ濡れた体のままこちらへ走ってくる。

理歩用のタオルにくるまれてはいるが、まだ全然体は拭いていない。

当然だ。

理歩の体を拭くのは、私の役割だ。

本当は脱衣所で待っている理歩を私がつかまえて、入浴で濡れた理歩の体を拭いてあげるはずだったのだけれど、理歩は待てずに脱衣所を一人で出てきてしまった。

「モド！」

理歩は一刻も早く、モドキに会いたかったのだろう。

モドキを見つけて、大喜びだ。

「いかん。ささみが見つかってしまう！」

モドキは慌ててささみステイックを袋に入れて、後ろに隠す。

タオルを羽織っただけで、まだ湯が滴っている理歩がモドキに抱きつけば、猫毛は理歩につくし、モドキは濡れてしまう。

危険だ！

「ささみよりも！ ほら、逃げて、モドキ！」

「うお！ それよりも早くつかまえんか！ 薰！」

「ワン！」

マロンも私を応援してくれている。

ここは、ラガーマンのようにタツクルして、理歩を止めなければ！

「モド！」

風呂上がりでピンク色のほつぺをした理歩は、お風呂が楽しかったのかテンションアゲアゲだ。

さあ、迎え撃つ私は、体力に自信のないアラサーのインドア派。

エンジン全開の元気な幼児、理歩に勝てるのか？

だが、見切っているのだよ。

生まれてからずっと、理歩のよちよち歩く姿を見ている私だ。

理歩の行動パターンは……あ……れ？

くっ！ 抜かれてしまった。

つかまえ損ねた！

「うおお！ 理歩、理歩、ちょっと待て！ 先に体を拭くのじゃあ！」

モドキは、慌てて猫タワーを駆け上る。

良かった。モドキの運動神経が発達していて。

……まあ、人間よりも俊敏だよね、猫だもん。

時々猫なのか疑いたくなるけど、モドキは猫のはずなのだ。

その後ようやく理歩をつかまえて、体を拭いて着替えさせる。

「どちらも放っておけばよいのじゃ。簡単じゃ」

猫タワーの上で香箱座こうばざわりしたモドキが、我々下々の人間を見下ろしながら宣のたまう。

私の膝には、ベビー用のマグで風呂上がりの麦茶を飲む理歩が座っている。

マロンは、騒ぎが落ち着いたので、部屋の隅のクッションでスヤスヤ眠っている。

「そういうものかなあ？」

私が相談したのは、最近の理歩のイヤイヤ行動と、会社での柿崎のバンドマン年下彼氏問題。

モドキは、その両方を放っておけと言っている。

「理歩は、自我が芽生え始める自分の気持ちのバランスが上手く取れないのであろ

う？ 成長している証拠だ。ほれ、思春期に突然、母をクソババア呼ばわりし始める年代と一緒だ。放っておけば、成長に伴い自然と収まるじゃろ」

そうか……そうよね。

中学生になった理歩が、「うるせえ、ババア！」と言ってくる姿は、全く想像がつかない。しかし、思春期に大人と子どもの狭間はざまで、なぜか不安になりイライラしてしまいう気持ちも、反抗したくなる気持ちも、分からなくもない。

青春小説なんかは、そんな不安定な年頃のガラス細工のような心の動きを描いたものが多く、とても感動する。

この間読んだ本なんて、ラストで号泣してしまったものだ。

今、理歩は赤ちゃんと子どもの狭間なんだなあ……と、思えば、ちよつと感慨深い。

「そして、その会社の親友の話。別段、気にする必要はないであろう？」

「だって、ちよつとは気になるじゃない」

「助けが必要ならば、向こうから話をしてくるじゃろう。そのときまで、放っておけばよいのじゃ。話をされたときに、静かに聞いてやる……それが、友というもののじゃ」猫タワーから、モドキの神託しんたくが下りてくる。

猫のお告げが正しいかどうかは分からないし、モドキは、別に神でも猫又でもないで、ありがたみもご利益りやくもないのだが、なんとなく腑ふに落ちる。

「そうよね。言う必要があるなら、言ってくるでしょ」

別に、友人だからって全てを曝さらけ出す必要はない。

いっそ……結婚とかが決まってからでも、遅くないくらいに。

一抹の寂しさを感じるが、恋愛のことを話すのも話さないのも、柿崎が決めることなのだ。

なんだ。簡単なことだ。

「理歩、麦茶飲み終わったみたいですね」

お風呂から上がってきた優一さんが、理歩の手からマグを取ろうとする。

「いやー」

理歩は、マグを離さない。え、なんで？

だって、もう飲み終わって空っぽなのに？

「もうちよつと持っておきたいようじゃの。放っておけ、直に飽あきる」

モドキが解説してくれる。

まあ……そっか。お気に入りのマグだものね。いつか、そのくらい。

「あ……そうだ」

「なんですか？」

コテンと首をかしげる優一さん。

可愛いな、私の夫。理歩そっくりの仕草だ。

そういう仕草、私的には、最高にツボなんだけれど。

つい、ふへへと、変顔になってしまいそうになるが、なんとかこらえる。

て、そうじゃないのよ、気になったのよ。

「優一さんって、やっぱり中学か高校のときには、クソババアとか言っていたの？」
そう。

全く言わないと思うの。

だって、優一さんはこんなに穏やかな性格だし。

でも、意外と昔は反抗期で暴れていたとか？

「ああ、反抗期ですか？」

優一さんは考え込む。

しっかりと正確に想い出してくれているのだろう。

真面目だ。

「いえ、なかったですね。部屋に閉じこもっていました。会話が減ったことはありましたが、クソババアとかは、言わなかったです」

「そうなんだ」

「だって、ラクシユがいましたから」

「ラクシユ？」

「ええ。ラクシユです。悩みは全部、ラクシユが聞いてくれましたし……」

いかん、優一さんの目がウルウルし始めた。

未だ心の傷が癒えない優一さん。

ラクシユのことを思い出すと、つい涙が溢れてくる。

そうよね……あんなに治療を頑張っていたし、ずっと、一緒にいた相棒だものね……

いかん、私も泣けてきた。

夫婦二人して、泣きそうになってこらえていると、鼻先をかすめて飛んでいくものがあつた。

理歩のマグだ。

マグは、フローリングの床に当たって、カラカラと転がっている。

「理歩？ それはダメだと思うよ？」

心が不安定な時期なのは理解した。

だが、破壊行動はよくない。

お母さん、それは、ちょっと駄目だと思う。

「いや！」

何が嫌なのか分からないが、理歩は、何かを否定する。

まだ、厳密には二歳になっていない一歳十一か月の理歩だ。

このイヤイヤ行動が、一年近く続くのかと思うと、ちょっと私のほうが情緒不安定になりそうだ。

世のお父さんお母さんは、こんな子どもの行動を受け止めているのかと思うと、すこすぎる。



次の日、出社すると何やら揉めている。

「だから！ あんたに関係ないでしょ？」

「ええ。気になりますってば！」

柿崎と幸恵が、わあわあ言い合っている。

さては幸恵のやつ……私が柿崎に彼氏の話をしないのに痺れを切らして、自分で聞きに行ったな？

そして、柿崎に『関係ない』と一蹴された。

始業時間にはなっていないけれど、やっぱりプライベートなことを会社で聞くのは、よくない気がする。

本人が自分から言うのであれば、世間話となるけれどもさ。

他人が詮索するのはやはり違う。

そういう詮索って結局、『髪切ったってことは、失恋？』とか『不機嫌だね、彼氏

と喧嘩した?』とか聞いてくる、昭和の悪しき習慣と同じではないか。

「はい、終了。もう、始業時間だし! 幸恵は、ちよつと遠慮しなよ」

私は柿崎を助けようと、間に割って入る。

柿崎は、係長の立場上、幸恵にはきつく言えない。

幸恵がすぐパワハラだって言い出すし。

ここは、平社員の子、本田薫が、末端の末端である立場を利用して、正しく幸恵に注意するべきであろう。

「でもお。気になります……」

幸恵よ、まだ言うか。

てか、何を指さして……うおい。

柿崎の指を彩る指輪、なんだか増えている。

二匹の蛇が絡み合うデザインだったのに、もう一つリングが追加されて、蛇の頭数が四匹になった上に、さらに赤い石まで付いている。

「いや……それでパソコンは……きつくはない?」

いいんだよ、柿崎に彼氏がいたって、誰から指輪をもらったって。

だって、柿崎のプライベートなもの。

友人なんだから、相談されれば聞けばいいこと。こちらから詮索すべきではない。

それは、猫モドキに言われるまでもない真理だ。

だが、あまりにコテコテの指輪の装飾。

キーボードを打つときに、大変ではないだろうか?

「大丈夫よ。根性あるから!」

「おお……柿崎に根性あるのは知っているけど……」

うん、知っている。

ええ、知っている。

我が部署の頼れる西根課長が、介護のために時短勤務している昨今、我が部署を一番支えてくれているのは、係長の柿崎だ。

前例のない大変な仕事に、誰しもがどんなときも働きやすい職場を目指して頑張ってくれているのは、根性がないとできないことだ。

「ほら、仕事!」

おおっと、そうだった。

柿崎に言われて、私は自分の席に着き仕事を始める。
本日もたくさんやらねばならぬことがあるのだ。

カタカタカタカタ……

あちらこちらかのデスクから連続した音が鳴り響く。

柿崎も軽快にキーボードを叩いているようだ。

さすがだ。なんの差しさわりもないみたいだ。

「くっ！ 指が！」

痛かったのだろうか。

柿崎が、左薬指を押さえている。

いや、差しさわりあるんじゃない。

ダメだろ、それ……

柿崎は気になるけれども、私も自分の仕事がある。

そう思って、それからしばらく一生懸命に伝票と向き合っていると、目が痛くなってきた。

ちよつと立ち上がって、トイレに向かおうと廊下を歩いていると、幸恵に給湯室に引きずり込まれた。

「何度でも言うけれどさ。私、仕事したいの」

「もう！ 薫さんたら！ 柿崎さんが詐欺師に騙だまされていてもいいんですか？」

え、詐欺師？

なんの話だ。

「バンドマン年下彼氏の話ではないの？」

そう言っていたら？ 幸恵よ。

「そうです！ そのバンドマン年下彼氏が、結婚詐欺師でロマンス詐欺師なんです！」

「なんでそんな極端な設定になるのよ」

柿崎は、ちよつと個性的な指輪をしているだけでしょ。

本人が、彼氏からもらったとも、結婚の約束とも言っていないんだったら、何をそんなに極端な妄想を膨らませているのだろう。

「柿崎さんの表情をよく見てください！ 時々スマホを見て真剣な顔したり、嬉しそうな顔したり」

「あんたね……柿崎のこと観察している暇があったら、仕事すれば？」

そう。幸恵が仕事をバリバリやってくれば、私の分担も減るの。

そうしたら、愛する我が子と愛する夫、愛するワンコと愛する猫モドキにも、早く会えるの。

そうよ、こうしてはいられないわ。

さっさと仕事して、定時には帰りたいのよ。

「待ってください！」

袖を幸恵に引つ張られて、私は身動きが取れない。

「だって、スマホに連絡があつて一喜一憂くらいするでしょ？ 私だってそうよ」

私だって、優一さんからの連絡には、きつと微笑みを浮かべて見ているはずだし。

「薫さんがスマホ見て変顔しているのは知っていますけれども、柿崎さんのは違うんです！」

幸恵？ そんなに私、変な顔している？

そりゃ、スマホの待ち受けは、麗しの推し俳優、ティミー様だし……ご尊顔を拝するたびに、その後光が差す笑顔に蕩けはしているかもだけど。

変顔にはなっていないと思うのよ……自信ないけれども。

「柿崎さん……年齢的にもきつと結婚に焦つていらつしやるんです。そんなときに、年下バンドマンの彼氏に、結婚を餌にいろいろと言われたら……そりゃ必死になっちゃいますよね……『俺がビッグになるためだ』なんて言われれば、お金もたくさんむしり取られちゃうかもです。きつと、あんな安物の指輪一つで、柿崎さんはいろいろと酷い目にあつているんです」

悪い男に騙される柿崎を心配して、涙ぐむ幸恵。

だが待て、それ、柿崎に失礼じゃない？

私たちよりも年上の柿崎とはいえ、別に今時、三十代の独身女性なんて珍しくもないし。

特に焦る必要なんて、柿崎には全くないじゃない。

そりゃ、好きな人と結婚できたら幸せだけでも、嫌なやつと結婚するくらいなら、独身のほうがよっぽど幸せだと思う。

幸せの形も、家族の形も、それぞれだ。

他人が口を出す問題ではない。

そもそも、バンドマン年下彼氏なるものが、柿崎に存在するかも分からないんだ。

「幸恵、それは……」

「ともかく！ 本日のお昼！ 柿崎さんに聞いただしてみますから！」

ええ、せっかくのお昼休憩を、そんな不穏なことに使うの？

せっかく今日は、美味しいパン屋さんのパンを買ってきたというのに。
美味しく食べられなくなっちゃう。

「薫さんも協力してくださいね！」

「嫌だよ」

即答した。

だって、嫌なもの。

なんのメリットがあつて、幸恵に協力せねばならぬのだ。

「薫さんは！ 柿崎さんが心配じゃないんですか！」

「いや……だからさ、そんなことを勝手に……」

「協力、頼みましたから！」

入社以来ずっと、相変わらず、まるつきり、私の言うことを全く聞かない幸恵は、

息巻いて席に戻ってしまった。給湯室に私を残したまま。

言ったよね、私……嫌だよってはっきりと。

言っただよ。聞いてもらえなかったけれども。

運命の昼休憩。

私は、ドキドキして更衣室に向かう。

「だって、心配なんです！」

幸恵の声だ。

「知らないわよ！ 勝手にごちゃごちゃ言わないで！」

これは、柿崎の声ね。

既に揉めている現場に入るのはかなり嫌だけれども、仕方ない。

私は、意を決して、更衣室の扉を開ける。

……うわ、めちゃくちゃ険悪だ。

睨み合う幸恵と柿崎。

「あ、薫さん！ ほら、薫さんからも何か言ってやってくださいよ！」

「な、何か？」

幸恵は何か言えつて言うけれどもさ、声、裏返りまくりの私。

「あゝ。柿崎？」

「何？ 薫まで、何か知りたいの？」

柿崎が呆れる。ごめんよ、柿崎。でも、ロマンス詐欺かどうかは気になるのよ。

「だって、柿崎さんたら、あの指輪、大切な人との想い出だつて言うんですよ？」

幸恵が息巻く。

「そうよ、それが何よ。これは、愛しい人との大切な時間の記念なの！」

柿崎が慥然として答える。

かなり機嫌は悪そうだ。

え……そうなの？ じゃあ、恋人からもらった指輪ってこと？

「指輪を手に入れるために、苦労したって！」

幸恵が、ロマンス詐欺を立証しようと躍起になっている。

「当たり前でしょ！ これを手に入れるために、どれだけ貯金を叩いたか！」

貯金？ え、柿崎、貯金って言った？ それは、かなりお金を使っているって

こと？

「貢いでいるってこと？」

私は、恐る恐る柿崎に聞いてみる。

「当然よ。だって、それが生きがいだもの！」

柿崎は、愛おしそうに指輪を見つめる。

これは……かなり入れ込んでいるのではないだろうか。

「ほら、やっぱり！」

幸恵がドヤ顔する。

そこ、ドヤ顔するところ？

「あのさ、柿崎？」

私も、ちよつと心配になってきた。

「何よ？」

「頻繁に会えているの？」

「薫、何言っているのよ。なかなか会えないから、貢ぐんじゃないの！ 日本に来てもらうためには、お金使わなきゃ来てくれないでしょ？」

当たり前じゃないって、柿崎は言うけれども……これ、マジか。やばくない？

「ひょっとして、海外の人ですか？」

幸恵が刑事のように柿崎を尋問する。

「そうよ？　なかなか日本には来られないの」

「お金持ちです？」

「だと思っよ？　SNSには、リッチな写真を上げているし」

海外に住むお金持ち、柿崎に大金を貢がせている、なかなか会えない。

それはもうロマンス詐欺で決定ではないだろうか？

「大体ですね、柿崎さんはもう若くないんですから、気をつけないと！　いいですか？　海外のお金持ちが日本に来るのに、柿崎さんに貢がせるわけがないんです！　自分で旅費ぐらい工面して、来たけりや来ますよ！」

だいぶ柿崎に失礼な出だしで始まった幸恵の言葉だが、後半のほうは、確かにそうだ。

おかしいのだ。

海外のお金持ちが、柿崎にお金を払わせるのは……

それは、ロマンス詐欺のなんたるかをあまり詳しく知らない私でも分かる。

「柿崎さん、騙されています！」

名探偵かよって、ツツコミ入れたくなるドヤ顔で、幸恵が断言する。

「騙されていないってば！」

柿崎が言い返す。

「騙されている人は、みんな言うんです！　『彼は私には誠実なの！』とか！」

「まあ、言うけれども。誠実よ」

幸恵と柿崎の言い合いを聞いて、私は、頭を抱える。

あかんやん。

つい、関西弁で頭抱えちゃうくらいに駄目な気がする。

ピロロロ……

柿崎のスマホが鳴る。

「あ、待って。大切なメール！」

柿崎が、慌ててスマホを見る。

件の彼からのメールなのだろうか、柿崎の顔が、パアアツと明るくなる。

「やった！ 来るって！ 日本に！」
すごく嬉しそうにスマホを抱きしめる柿崎は、とっても乙女で可愛いが、すごく心配だ。

「どうしよう。チケット取れるかな？」

柿崎がウキウキしている。

え……チケット？

「アリーナ、きつと抽選だよね？」

柿崎が、左手に嵌めた指輪を右手で愛しそうに擦る。^{さす}

「……アリーナ……」

私は、幸恵を見る。

おい、幸恵？ これは、違うんじゃない？

「あ……あの、良かったですねえ……」

今まで散々、ロマンス詐欺だって騒いでいた幸恵の声のトーンが落ちる。

ええ、そうでしょうね。

これは、完全に、『推し活』だよね？

「ひょっとして、ヘヴィメタバンドのオリジナルグッズ？ その指輪……」

私は、柿崎に確かめてみる。

「そう、前回と前々回に来日したときに手に入れた限定グッズ！ アリーナのプラチナチケット限定の記念グッズだったから、手に入れるのに、貢ぎまくったのよ！」

とても嬉しそうな柿崎を見て、私は理解する。

なるほど……

「また来てくれるように願掛けしていたんだけど、効果あったわ！」

嬉しそうな柿崎。

私の推し様、ティミー様も海外にお住まいだから、推しが来日してくれる喜びはすごく分かる。

ティミー様は映画俳優だから、日本で上映されるプロモーションのときにしかお越しにならないし、会える確率は少ないけれども、それでも同じ日本に推し様がいると思えば、心弾む。

私もティミー様のアリーナ限定グッズなんてあれば、命がけで手に入れるだろう。

「アリーナ、手に入るといいですねえ……」

幸恵はとてにこやかに答える。

おい、誰だ、ロマンス詐欺なんて言っていたやつは！

結局、柿崎がロマンス詐欺に引っ掛かったという疑惑は、幸恵の勘違いだった。

あの指輪は、柿崎がライブで買ったグッズだった。

「アリーナ席に座る熱心なファンはね、『花嫁』^{フラワー}って呼ばれるのよ」

推しを語る者独特の、あの恍惚とした表情を浮かべて、柿崎は推しバンドの魅力を語る。

指輪は花嫁の象徴で、ファンにとつては特別な意味があるらしい。

指輪に文字が彫ってある。あれがバンドの名前なのかな？

熱狂的なファンになると世界中のツアーに参加し指輪を集めているらしいが、さすがに我々の乏しい給与ではそこまでできるわけもなく、柿崎は、いつになるか分からない来日公演のために、お弁当は手作りし、日々節約してコツコツ貯めているのだそう。

確かに柿崎はいつも手作り弁当を持ってきた。

料理上手といえども、毎日激務の中で用意するのはつらくないのかと思っ

けれども、あれも推し活の一環だったのか。

「今回のライブチケットは？」

私は、柿崎に聞いてみる。

「それがまだ正確な日付も決まっていないのよ」

柿崎は、バンドの公式ホームページを確認しながら答える。

「だったら、もうしばらくその指輪は嵌めたまま？」

願掛けならば、チケットを入手するまで……あるいは、ライブ開催までは指輪はつけっぱなしだろう。

「うん。もちろんよ！」

柿崎は幸せそう。

そりゃ、推し様が日本に来てくださるなんて、推している人間からすれば、嬉しい限りだろう。

「それならそうと、早く言ってくればいいのに」

ブツブツと文句を言い続けているのは幸恵だ。

「あんだね、言ったら絶対に馬鹿にするでしょ」

ジロリと幸恵を柿崎が睨む。

「当たり前です！ 大の大人が、推し活でそんな変な指輪をして生活するなんて、ありえません！ 普通はですね、大人の女性は、大人に相應ふさわしい装いをするものなんです！」

幸恵が言うことが、一ミリも私には理解できない。

なんだよ、大人に相應ふさわしい装いつて。

別に、周りに迷惑をかけないならば、どんな格好をしてもいいはずだ。

そりゃ……お葬式に理由もなくド派手な格好をするのは憚はばられるし、結婚式に白いドレスを着て行くのはダメとかは分かる。

だが、それだって、出先で訃報ふほうを聞いて喪服も用意できずに慌てて駆け付けた人……とか、花嫁に復讐の意味を込めて……とか、何か理由があればOKだろう。

あ、いや、復讐は駄目か。結婚式が血に染まってしまう。

ミステリ好きのママ友の遠藤えんどうさんに、ちよつと影響されすぎたかもしれない。

「別に、私たちは、お客様に会う仕事でもない経理の仕事よ？ いいじゃない、指輪ぐらい」

立ち読みサンプル はここまで

私は、幸恵に言い返す。

「薰！ そうよ、そうよね！」

柿崎は、うんうんと首を縦に振って、私の意見に賛同してくれる。

「ええ。そういうところ、薰さんも柿崎さんも、世間からずれているんですよえ」

幸恵は、まだぶつぶつ言っている。

知らんがな、幸恵の周辺の世間の話は。

「大人として、良識を持って行動してくださいよ！」

ロマンス詐欺説くづかが覆くされてご不満の幸恵は、その日の業務中もずっと不機嫌だった。



家に帰って、私は、猫モドキに呆れられる。

「だから申したであらう？ 放っておけと」

この上から目線の偉そうなセリフは、猫モドキのセリフだ。

言葉が偉そうなだけではない、文字通り上から。